

被爆70年 平和誓う世界

英国 広島の子童画展示

日本の敗戦後まもない1950年代初め、被爆地・広島などから英国へ、文化交流と平和推進のために贈られた児童画60点余りの展覧会が、被爆70年に合わせて5日からロンドンで始まった。コレクションを管理する英国人は「平凡な日常の描写を通じ、平和の大切さを訴えかける強さがある」とたたえている。

日英交流のための助成や

イベントを主催する英民間団体「大和日英基金」で展示されているのは、40年代末から50年代初めにかけて、私立広島女学院（広島市中区）の中高生を中心に広島の子らが描いた34点とユネスコ（国連教育科学文化機関）の提唱に応じて全

国の児童が描いた29点。

広島女学院は爆心地の近くに位置し、生徒330人が被爆死した。当時院長を務め、戦後に海外との平和交流を進めた松本卓夫さん（86年没）が53年ごろ、英中部マンチェスターで美術教育の中心人物だったブリー・ウオリス・マイヤーズさん（00年没）の元へ、両方のコレクションを渡したとみられる。

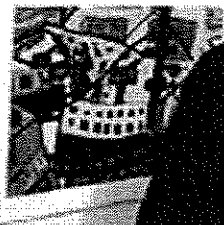
教師マイク・ステイブソンさん（71）は、マイヤーズさんが亡くなる直前、詳しい経緯を聞かないままコレクションを託された。

広島の子童画は、原爆ドームを描いたもの1点以外は、子供たちの身の回りの風景や静物画ばかりで、原爆の傷をうかがわせるものはない。ステイブソンさんは「被爆体験を持っていないはずの世代なので、最初は不思議に思ったが、日常こそ人間性の表現であり、おぞましい被爆体験に対する反証だったのでないか」と話している。

ステイブソンさんは「私は所蔵者ではなく、託されて管理しているだけ。

ぜひ広島に、日本に戻したい」として、マンチェスター市を通じて送るなどの方法を検討している。

「終戦直後なのにおぞましい原爆の記憶を描いていない広島の子たちの絵にむしろ強さを感じる」と語るステイブソンさん（ロンドン）



（ロンドン＝梅原季哉）